

今回の取材は

国本愛（横浜支局） 2015年入社。横浜支局に配属され、警察・司法やスポーツなどを担当。津久井やまゆり園の殺傷事件では発生初日に現場に入った。尾野さん夫妻とは料理をしたり買い物をしたり、プライベートでも交流を続けている。



取材する国本記者

「お父さん」と呼ばれて

ストーリー

相模原事件を語り続ける尾野剛志さん

生きていく意味「代弁

1面からつづく

昨年7月26日未明、多くの入所者が刃物で刺された知的障害者施設「津久井やまゆり園」。尾野剛志さん（33）と妻チキ子さん（36）は午前7時半ごろ、職員から渡された名簿に目を走らせた。無事な入居者には○印がある。気が動転し、すぐに名前を確認できない。ようやく見つけた「矢さん（44）の名前。脇に、病院名があった。

「一報は知人からの電話だった。車を走らせ園に駆けつけた。『矢！』と叫んだ。居住棟に入ろうとして、警察官に止められた。黄色いテープの先の廊下に点々と血だまりが見える。騒然とした現場から病院へ向かうため車に乗り込んだ。手が震えて、カーナビがうまく設定できない。

「首」のど、腹に傷があります。搬送先の病院の医師は説明した。意識不明の重体という。腹部の傷は深く、大腸を切断する直前で背中に達していた。集中治療室に、人工呼吸器をつけた「矢さん」がいた。

「矢、矢」 剛志さんが顔をなでると、矢さんの目から涙がこぼれた。「俺たちの声が聞

「矢さんは、事故で世界したチキさんの前夫の子供だ。トラック運転手だった剛志さんは、クリーニング店を一人で切り盛りしていたチキさんと、偶然出会った飲食店で意気投合。3回目のデートで自宅を訪れると、3畳間にちよここと足をそろえて「矢さんが立っていた。こちらを見つめる

「お父さん、お父さん、お父さん、お父さん……」 剛志さんの目から涙がこぼれた。「お父さん、お父さんとお母さんのところに帰ってきてくれた。頭を抱き、ほおずりした。

「矢さんが自ら『お父さん』と呼んだのは、この時が初めてだった。『わかったよ。そんなに呼ばなくても大丈夫。そばにいるから』。剛志さんが諭すほど、矢さんの勢いは止まらなかった。これまでの分を取り戻すかのように。



週に1度家族1横の飯を一緒に食べる剛志さん、矢さん、チキさん、横浜港南地区自14日、和田典典撮影。1986年6月27日、障害児施設の見学に尾野家、チキさんは矢さんの好きなおみやげやおやつをバスケットにいっしょに持って来た。尾野さん撮影

剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

「優しい、強く、批判恐れず」 剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

「優しい、強く、批判恐れず」 剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

「優しい、強く、批判恐れず」 剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

「優しい、強く、批判恐れず」 剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

「優しい、強く、批判恐れず」 剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

「優しい、強く、批判恐れず」 剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

「優しい、強く、批判恐れず」 剛志さんが初めて報道陣の取材を受けたのは、事件の翌日だった。家を訪問してきた一人の記者に「矢さんのことを尋ねられ、戸惑いつつ匿名で取材に応じた。別の記者が訪れた。矢さんがかけがえない存在であること、理不尽に傷つけられたことへの思い……。話し始める言葉があふれた。自分の名前と顔を出すことを了解すると、それを機に報道陣が押し寄せた。それでも、尋ねられるたびに丁寧に答えた。「息子は宝物のような存在です」

ツイッター (@mainichisyon) 発信中です。ストーリーの掲載日に執筆記者の「ひと言」を紹介しています。

